

田村遺跡群発掘調査概報

－高知空港第2次拡張整備事業に伴う

平成8～13年度田村遺跡群発掘調査概要報告－



2002.3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

田村遺跡群発掘調査概報

－高知空港第2次拡張整備事業に伴う

平成8～13年度田村遺跡群発掘調査概要報告－

2002.3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は、高知空港拡張整備事業に伴い平成8年度から実施された田村遺跡群の発掘調査の概要を記録したものであり、現時点での調査成果を中心とした。
2. 発掘調査は、国土交通省四国地方整備局の委託を受けた高知県教育委員会が調査主体となり、県教育委員会から再委託を受けた(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが調査を実施した。
3. 田村遺跡群は高知県南国市田村に所在する。発掘調査は平成8年10月から実施しており、平成13年12月にすべての現地調査を終了した。

4. 発掘調査は以下の体制で行った。

総 括－所長 古谷碩志、河崎正幸、門田伍朗

総 務－総務課長 田岡英雄、次長兼総務課長 津野洲夫、島内信雄、主任 山本三津子
主幹 吉岡利一、石川馨、大原裕幸、中城英人

調査総括－調査課長 岩崎嘉郎、西川裕、重森勝彦

調査担当－調査第2班長 森田尚宏、専門調査員 田坂京子、小島恵子、泉幸代、三橋麻里、
名木郁、主任調査員 前田光雄、浜田恵子、堅田至、山田和吉、坂本憲昭、
吉成承三、調査員 畠中宏一、坂本裕一、小野由香、調査補助員 松田重治、
川端清司、技術補助員 宮地啓介、坂本憲彦、大賀幸子、澤江和美、岩崎一步、
西村譲治

5. 本書の執筆は小野が、編集は森田が行った。写真撮影については各調査員が行った。
6. 発掘調査にあたっては、地権者をはじめとする地元の方々、委託者である国土交通省四国地方整備局、高知県高知空港整備事務所、工事施工業者等にご協力を頂いた。記して感謝します。
また、埋蔵文化財センターの調査員一同には現場の応援を含め協力を得た。記して感謝します。
7. 出土遺物等の資料は、高知県立埋蔵文化財センターにて保管し、現在整理中である。

なお、各年度の調査略号は次のとおりである。

1996(平成8)年度・・・96-9NT	1999(平成11)年度・・・99-1NT
1997(平成9)年度・・・97-1NT	2000(平成12)年度・・・00-1NT
1998(平成10)年度・・・98-1NT	2001(平成13)年度・・・01-1NT

目 次

1. はじめに.....	1
2. 地理的・歴史的環境.....	2
3. 田村遺跡群の概要	4
1) これまでの調査の概要	4
2) 遺跡の立地と微地形	6
4. 今回の調査成果	9
1) 縄文時代	10
2) 弥生時代	12
[1] 前期	14
[2] 中・後期	20
(1) 竪穴住居跡.....	22
(2) 掘立柱建物跡	23
(3) 土坑	24
(4) 溝跡・自然流路.....	25
遺物実測図.....	26
3) 古代	31
4) 中・近世	34
5. まとめ	36

1. はじめに

田村遺跡群は物部川下流右岸の新期扇状地に立地し、昭和30年以降数度の発掘調査が行われてきた。その中でも昭和55～58年度に行われた、高知空港の滑走路拡張に伴う調査により田村遺跡群は、縄文時代から近世に至る県下最大の複合遺跡であることが明らかとなった。特に弥生時代と中世が田村遺跡群の主体を占め、弥生時代には全時期を通しての拠点集落として、中世には土佐国の守護代細川氏の居館である田村城館跡を中心とした一大拠点地域として機能していたことが判明し、大きな成果を上げている。

今回の調査は第2次空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査で、昭和59年に完成した2,000m滑走路を2,500mに再拡張するために実施されたものであり、田村遺跡群の大規模な発掘調査としては、前回の滑走路拡張に伴う調査に続くものである。今回の滑走路の拡張範囲は約24万 m^2 にも及び、前回調査の成果から発掘調査面積は約15万 m^2 になると想定された。現進入灯部分の調査成果からも弥生時代中～後期の集落全体がかかるものと見られたが、拡張範囲全体の遺構密度は不明であった。そのため本調査に着手する以前に、拡張範囲全体を対象とした試掘調査を行うこととした。試掘調査は現地の状況に合わせ、平成8年8～9月に第一次、平成9年2～3月に本調査と並行しながら第二次試掘調査を実施した。試掘調査面積は2,368 m^2 であった。

田村遺跡群の本調査は、第一次試掘調査終了後の平成8年10月から開始され、3ヶ年継続して平成11年度に面的調査はほぼ終了した。続いて平成12年度からは補償工事分の道路水路及び市道地下道工事に伴う調査、平成13年度には現況水路のため残されていたC3区の調査が行われ、平成8年から継続された田村遺跡群の調査は平成13年度をもってすべて終了した。

調査面積は平成8年度17,387 m^2 、平成9年度46,959 m^2 、平成10年度51,353 m^2 、平成11年度25,704 m^2 、平成12年度9,772 m^2 、平成13年度2,535 m^2 であり、総調査面積は153,710 m^2 であった。



田村遺跡群 調査区航空写真

2. 地理的・歴史的環境

田村遺跡群の所在する南国市は、東西に長い高知県のほぼ中央部に位置し、県下最大の穀倉地帯である香長平野を有している。地質的には中央構造線以南の外帯にあたり、北から南へ向かって古い地層から新しい地層へと帯状に配置されている。そのため市域の北境界線付近では標高約800mの山地から南に行くに従い次第に標高を下げ、150m前後の丘陵となり、ついには平野に没する。香長平野のほとんどは物部川の新时期扇状地が占めており、その大部分は開析を受けていないため、扇頂を要に土砂を前面の低地に堆積させるとともに、多くの旧河道や凹地列が放射状に派流するのが特徴である。それら派流の中には田村遺跡群内を南北に流れる田村川も含まれる。本来の自然吐流口は当遺跡群より3、4km北に位置する岩積付近にあったとみられ、現在の景観ができ上がったのは近世の物部川堤防の強化以降のことである。こういった派流、旧河道地形とともに自然堤防や砂礫堆の発達が見受けられ、田村遺跡群もそうした自然堤防上に立地している。また、香長平野南部の低湿な三角州は、西半は標高5m線に一致し、東方は南に伸長して高知空港南縁に達する広域にみられる。特に里改田南方に広がる三角州では、表層の砂質シルト下に、泥炭化したアシ層、粘土層が確認されており、かつて潟湖であったと考えられる。そして潟湖の南には浜堤が形成される。

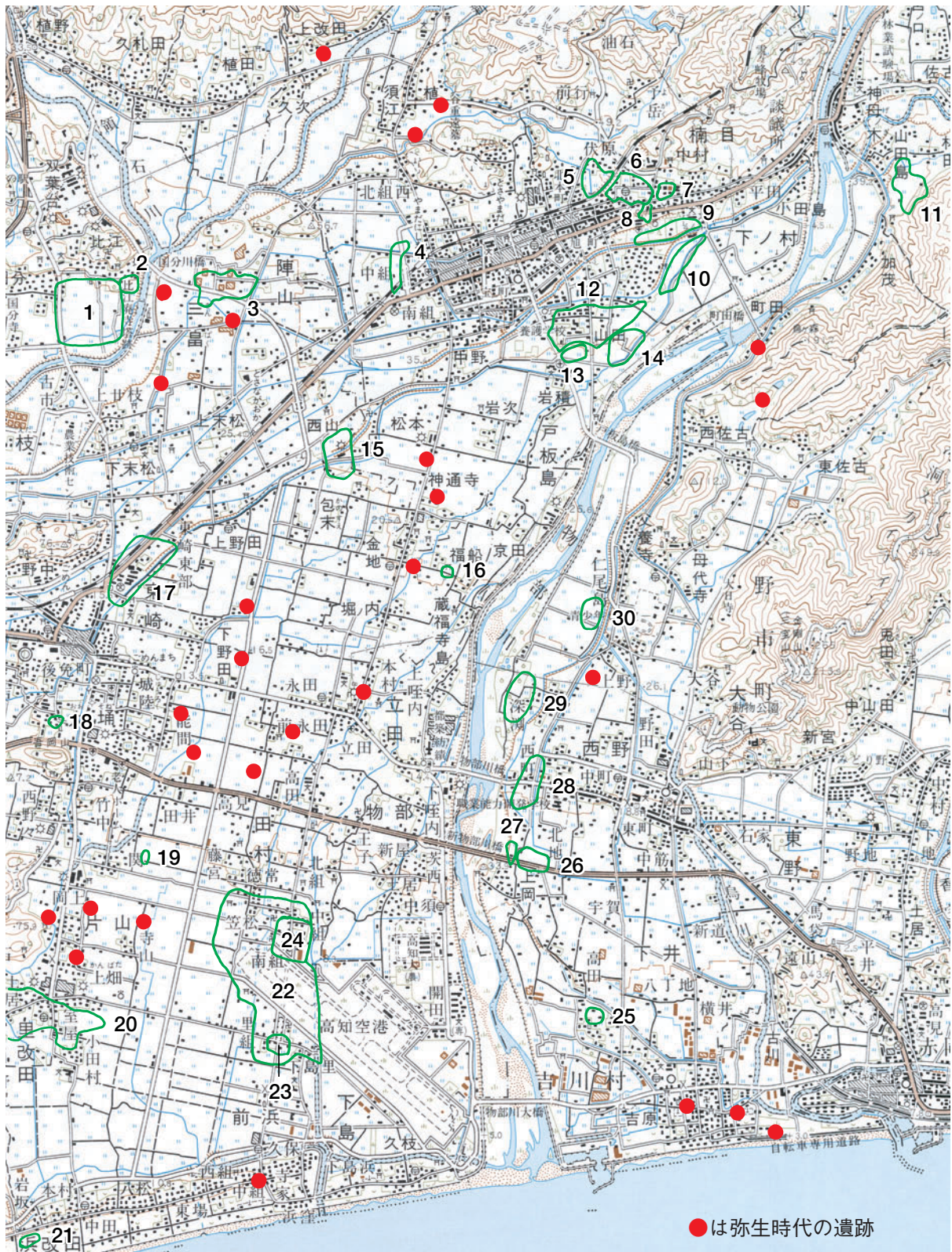
このような地理的環境は遺跡の立地にも影響を与えていると言える。南国市内の旧石器時代の遺跡は、岩陰に形成された奥谷南遺跡が唯一確認されているのみであり、高速道路建設に伴い調査が行われ、ナイフ型石器や細石刃・石核等が出土している。縄文時代になると遺跡は増加し、前述の奥谷南遺跡、栄エ田遺跡、田村遺跡群等があげられる。田村遺跡群では縄文時代前期～後期の遺物が出土しており、標高8m前後の平野部にも比較的早い時期から遺跡が立地する。

弥生時代に入ると、香長平野を中心に遺跡は激増する。その中でも田村遺跡群は弥生時代前期から後期前半にかけての拠点集落として、中心的役割を果たしたとみられる。弥生時代後期になり田村遺跡群が衰退してくる時期には、東崎遺跡、三島遺跡、土佐山田町のひびのき遺跡、原遺跡、林田遺跡などの集落が長岡台地上に新たに出現する。

古墳時代には丘陵部に多くの古墳群が築造されるようになる。それらのうち長畝2号墳は前期古墳、狭間古墳及び長畝3号墳が中期古墳にあげられる。他は後期の群集墳が多くを占め、特に舟岩古墳群は22基からなる県内最大の古墳群である。

古代になると、香長平野には土佐国衙が所在し、国衙の西には土佐国分寺跡が、北東部には比江廃寺跡が存在する。また物部川右岸の田村遺跡群、左岸の下ノ坪遺跡でも古代の建物群が検出されており、官衙との関連性も考えられている。

中世では土佐国守護代である細川氏の居館とされる田村城館跡や千屋城跡が、丘陵部には長宗我部氏の居城である岡豊城などの城跡が点在する。その後長宗我部氏が衰亡し、代わって入国した山内一豊は浦戸城から大高坂城（後の高知城）に居を移し、山内藩政は高知市の城下町を中心に展開されることとなり、それまでの中心地である香長平野は農村集落として発展していくこととなる。



第1図 周辺の遺跡分布図 (S = 1/50,000)

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	土佐国府跡	弥生～中世	9	楠目遺跡	弥生～近世	17	東崎遺跡	弥生～中世	25	野口遺跡	弥生～中世
2	比江廃寺跡	古代	10	稲荷前遺跡	弥生～近世	18	大篠遺跡	弥生	26	北地遺跡	弥生
3	三島遺跡	弥生～平安	11	林田遺跡	弥生～中世	19	関町田遺跡	弥生(銅鐸出土)	27	下ノ坪遺跡	弥生～古代
4	山田三ツ又東遺跡	弥生～近世	12	原遺跡	弥生～近世	20	里改田遺跡	弥生～中世	28	西野遺跡群	弥生・古墳・古代
5	伏原遺跡	弥生～古代	13	原南遺跡	弥生～近世	21	岩坂遺跡	弥生	29	深淵遺跡	縄文～近世
6	ひびのきサウジ遺跡	弥生～近世	14	高柳遺跡	弥生～中世	22	田村遺跡群	縄文～近世	30	深淵北遺跡	弥生～中世
7	ひびのき遺跡	弥生・古墳	15	金地遺跡	弥生・古代・中世	23	千屋城跡	中世			
8	大塚遺跡	弥生～近世	16	岩村土居城跡	弥生・中世	24	田村城館跡	中世			

3. 田村遺跡群の概要

1) これまでの調査の概要

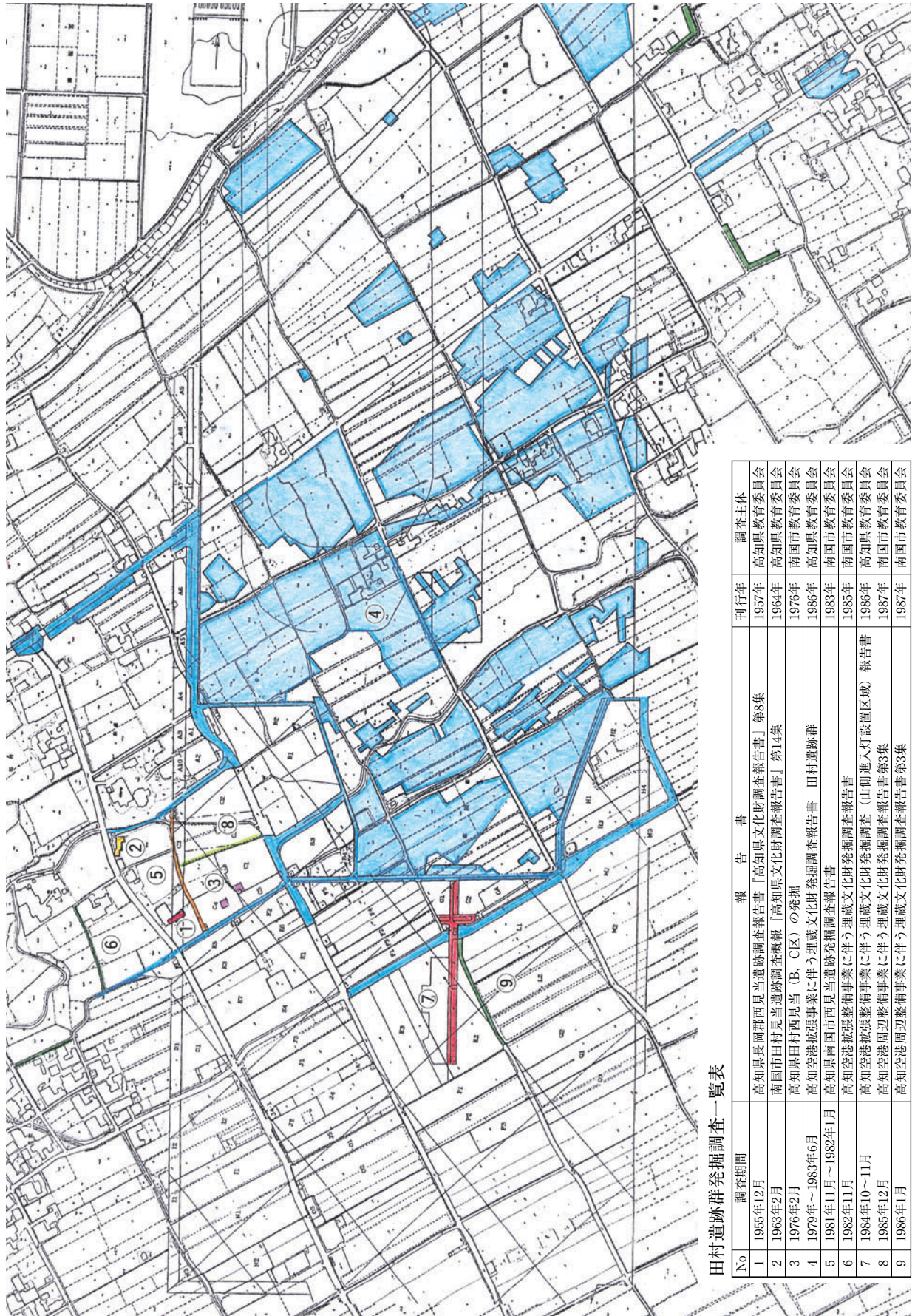
田村遺跡群はこれまでに、数度の発掘調査が行われている。遺跡群内には見当遺跡、西見当遺跡、カリヤ遺跡のように、発掘調査等によって既に周知された遺跡を内包している。第2図はこれまでに行われた発掘調査の一覧と調査範囲である。

田村遺跡群の調査は、昭和30年西見当遺跡(A地区)の発見に端を発する。同年12月に高知県教育委員会によって遺跡の発掘調査が行われ、弥生時代前期の貯蔵穴とそれを取り巻く周溝が確認された。これらの遺構内からは同時期の遺物が出土しており、発見された場所の地名を取って西見当式土器と称された。昭和38年2月には、A地区より約80m東の見当遺跡の緊急発掘調査が行われた。遺構は後世の攪乱により確認することはできなかったが、弥生時代を主体とする土器片、石器類が出土した。またそれまで確認されていなかった縄文時代晩期の土器片も少量であるが出土しており、田村遺跡群周辺での縄文晩期の遺跡の存在が示唆された。昭和49年には西見当遺跡で、土器片の中から銅鐸の舌が偶然発見された。また異なる地点から磨製石鏃も発見されており、銅鐸の舌の出土地点を西見当C地区、磨製石鏃出土地点をB地区として、昭和51年に南国市教育委員会による発掘調査が行われた。その結果、幅1.17m、深さ75cmを測る、断面が緩やかなU字状の環濠(内濠)や、貯蔵穴、工房跡とみられる土坑とともに、土器、石器などの遺物が検出された。また貯蔵穴内からは鳥獣・魚の骨片、炭化米なども出土している。二次にわたる西見当遺跡の調査によって、西見当遺跡が環濠を持つ集落であること、高知県中央部の弥生文化が弥生時代前期前半に遡ることなどが明らかとなった。これら西見当A～C地区は今回の調査区のC区に当たる。

田村遺跡群の大規模な発掘調査は、高知空港拡張整備事業に伴い昭和55～58年度の四ヶ年に行われた。この調査では縄文時代から近現代に至る各時代の遺構・遺物が検出されており、中でも弥生時代と中世の2時代の遺構・遺物が最も多く、田村遺跡群の主体となっている。各時代の遺構・遺物としては、縄文時代では後期の土器と多量の打製石斧が出土している。弥生時代になると前期初頭の集落跡と前期の小区画水田跡、中期末～後期前半の集落跡が確認され、それに伴う遺物が大量に出土した。また古代の遺構としては平安時代の整然とした方向と配置を持つ掘立柱建物跡が確認され、荘園(田村庄)との関連が考えられている。中世では環濠屋敷跡が確認され、母屋・納屋などの掘立柱建物跡や石組み井戸などが検出されている。これらの調査成果は大いに注目され、特に弥生時代の集落の調査は高知県中央部における様相を解明するうえで貴重なものとなった。

昭和56年度には西見当地区の農道改良工事に伴う発掘調査が、南国市教育委員会によって行われた。調査区はA～D区に分けられ、いずれも環濠内の調査であった。遺構は土坑2基、溝跡1条が確認され、遺物は前期前半の土器及びそれに伴う石器が出土している。

田村遺跡群の今回の調査E区はカリヤ遺跡と呼ばれ、明治32年に5本の広形銅矛が出土した。これより約130m北に所在する北カリヤ遺跡では昭和57年11月に発掘調査が行われており、竪穴住居跡1棟、土坑、溝跡、ピットなどが検出されている。また、昭和59～61年度にかけて、空港周辺整備事業関連の発掘調査が高知県及び南国市の教育委員会によって行われている。



田村遺跡群発掘調査一覧表

No	調査期間	報告書	刊行年	調査主体
1	1955年12月	高知県長岡郡西見当遺跡調査報告書「高知県文化財調査報告書」第8集	1957年	高知県教育委員会
2	1963年2月	南国市田村見当遺跡調査概報「高知県文化財調査報告書」第14集	1964年	高知県教育委員会
3	1976年2月	高知県田村西見当(B、C区)の発掘	1976年	南国市教育委員会
4	1979年～1983年6月	高知空港拡張事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群	1986年	高知県教育委員会
5	1981年11月～1982年1月	高知県南国市西見当遺跡発掘調査報告書	1983年	南国市教育委員会
6	1982年11月	高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	1985年	南国市教育委員会
7	1984年10～11月	高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(山側進入灯設置区域)報告書	1986年	高知県教育委員会
8	1985年12月	高知空港周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集	1987年	南国市教育委員会
9	1986年1月	高知空港周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集	1987年	南国市教育委員会

第2図 これまでの調査区位置図 (S=1/5,000)

2) 遺跡の立地と微地形

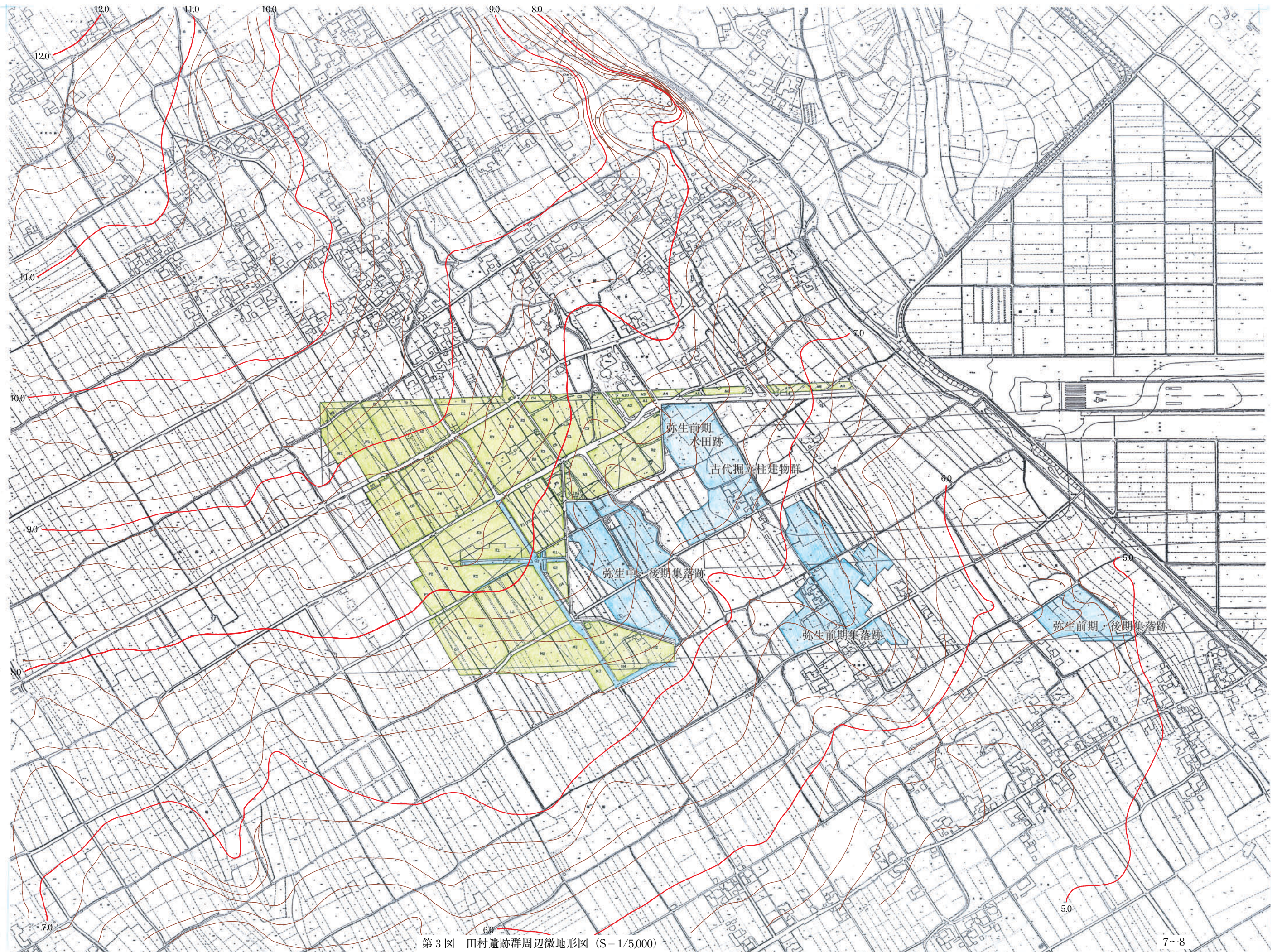
田村遺跡群は物部川右岸の、標高6～9mの低地に所在する遺跡である。本遺跡群周辺の地形は、物部川に沿って沖積扇状地が、そしてその両側には開析扇状地が広がる。開析扇状地は土佐山田町、野市町に発達しており、土佐山田町ひびのき遺跡、林田遺跡、原遺跡など弥生時代～古墳時代にかけての遺跡が認められる。また本遺跡群から南に約7mの海岸部には砂丘(砂州)が発達するが、田村に集落が営まれた弥生時代には海岸部に浜堤が形成され、その内側には潟湖が広がっていたと考えられる。多くの新期扇状地がそうであるように、香長平野においても多くの旧河道や凹地列が放射状に派流する。田村遺跡群を南北に縦断する田村川もその派流の一つである。

第3図は田村遺跡群周辺の微地形図である。地形的に北西から南東の物部川河口に向かって、徐々に落ち込んでいくのが看取される。調査区北西部のN区では標高9m前後、直線距離で約600m南東のH区では標高6m前後を測り、比高差は約3mになる。全体的に極端な等高線の粗密は認められないが、調査C区、B区から滑走路下を縦断し南へ流れる田村川、さらに東の秋田川では等高線は密になり、急傾斜地の様相を呈する。発掘調査の結果からも、C3区では現在の田村川の下層に弥生時代の旧河川が確認されており、弥生時代から若干移動しながら河川が流れていたことがうかがえる。またD・E・F・I・J・K・L区など弥生時代中・後期の竪穴住居跡が集中する調査区は、等高線が比較的疎であり、選地の際に意図して緩傾斜地が選ばれたと考えられる。調査区を横断あるいは縦断する溝は、等高線に沿って掘られたものもあるが、I・L区で見られるような等高線と直交するものもあり、断面観察からも集落の区画あるいは排水施設などのために意図的に掘削されたと考えられる。意図的な溝の配置は弥生時代前期の環濠集落にも認められる。

また微地形図には表れなかったが、発掘調査によって田村遺跡群の各調査区あるいは同じ調査区内であっても遺構の残存状況が大きく異なっており、後世に水田化により削平された結果と考えられ、本来は自然堤防上の細かい高低差のみられる土地であったと推測される。



田村遺跡群 調査区航空写真遠景（北西より）

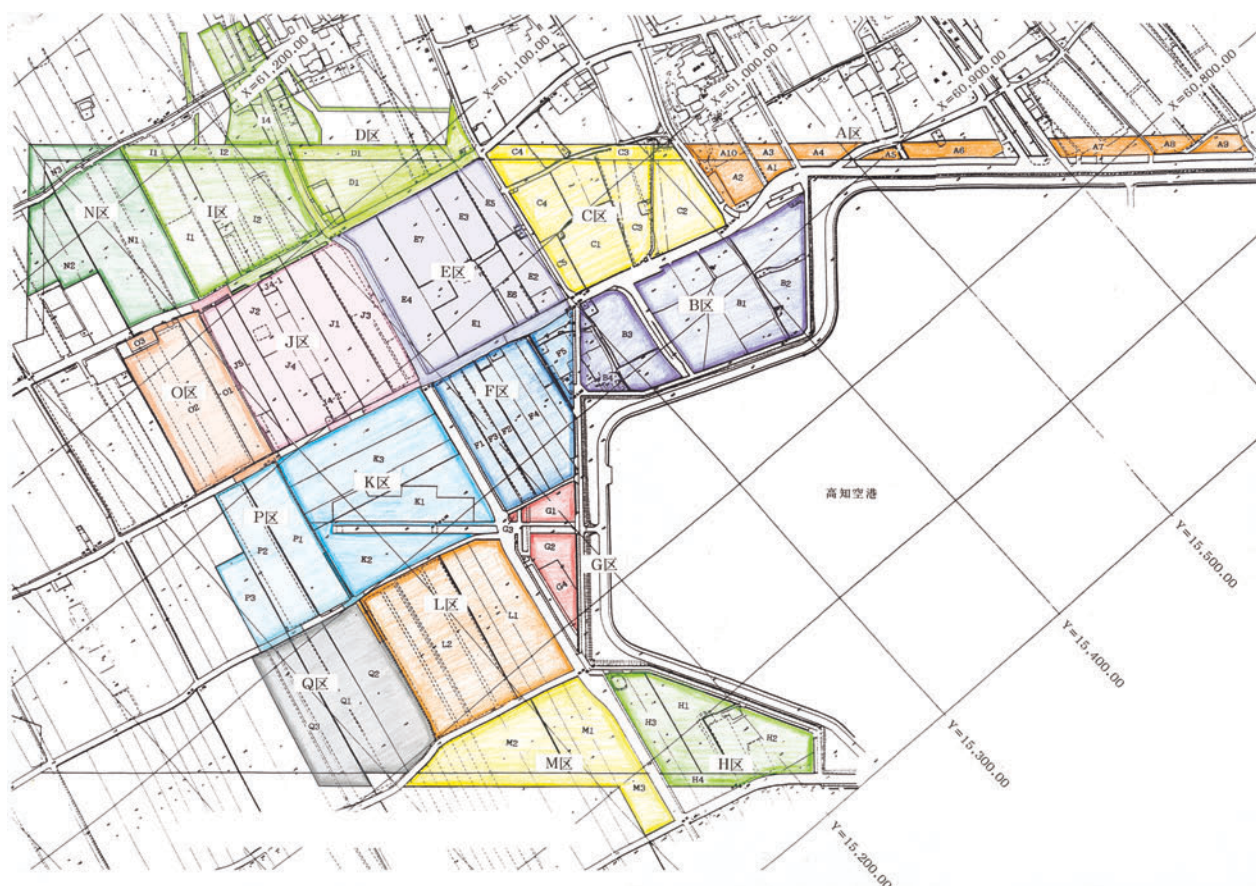


第3図 田村遺跡群周辺微地形図 (S=1/5,000)

4. 今回の調査成果

今回の調査対象地区は、国土交通省が実施する高知空港拡張整備事業に伴うものである。調査対象面積は約24万m²と膨大なため、調査対象地の北東(田村城館跡)から、現況での道路・水路などで区画される約1町四方を1つの大調査区とし、東方から西方に向かってアルファベットA～Qまでを付した。さらにA～Qの大調査区の中は、調査年度ごとに区割りし調査区を設定した。基準となるグリッドは公共座標に沿って調査対象地全域に設定した。100mの大グリッド、20mの中グリッド、4mの小グリッドを単位とし、全てのグリッドは北西端をポイントとした。

今回の調査では縄文時代、弥生時代、古代～近世に至る時期の遺構・遺物が検出された。縄文時代はこれまでの調査により後期から認められたが、今回の調査で縄文時代前期の遺物も出土し、田村遺跡群の上限は縄文時代前期に遡ることが明らかとなった。調査の主体となる弥生時代の遺構・遺物は調査対象地区のほぼ全域で確認され、時期も偏重はあるものの弥生時代前期から後期までのものが出土している。今回の調査は田村の集落の中心であり、集落の変遷やその様相を明らかにする上で貴重な資料が得られた。また、I区、D区、F区からは古代の掘立柱建物群が検出されており、前回の調査で確認された寺の前地区の掘立柱建物群との関連が想定される。古代の遺構群はI4区の調査結果からさらに北方に広がるとみられる。また、中世では細川氏の居館である田村城館跡の南に位置するB区において中世の環濠屋敷跡が確認されており、縄文時代から中世に至るまで田村遺跡群が一大中心地として利用されていたことがうかがえる。



第4図 調査区全体図 (S = 1/5,000)

1) 縄文時代

前回の調査では、田村遺跡群のシマイテン地区で縄文時代後期の遺物が検出されており、縄文時代後期には低地部でも人々の生活が営まれていたことが明らかとなった。特に多量の打製石斧の出土は特徴的であり、出土した土器とともに瀬戸内との交流や生業のあり方が考えられた。

今回の調査で縄文時代の遺構・遺物が検出されたのはJ3・H・M区である。そのうちH・M区は調査対象範囲の南東部に位置し、前回調査が行われたシマイテン地区(Loc.47)の東西隣にあたる。そのため今回の調査ではそれに続く縄文時代の遺構・遺物の広がりが期待された。調査によりH区で後期の遺構の広がりが確認されるとともに、新たにM区では縄文時代前期、中期の遺物が出土し、田村遺跡群の上限が縄文時代前期に遡ることが判明した。またH・M区よ



M区 縄文土器(前期)

りさらに200mほど北に位置するJ3区でも縄文時代後期の遺構・遺物が検出されている。J3区は弥生時代中・後期の集落の中心部にあたり、それまで縄文時代の遺構等は確認されていなかったが、今回の発掘調査により縄文時代後期の集落の広がりが確認された。

縄文時代前期～後期の遺物が出土したM区は、前回調査の行われたシマイテン地区の西隣の調査区であり、縄文時代前期、中期の遺物及び後期の遺構・遺物が検出されている。縄文時代前期、中期の土器は自然流路から出土しており、周辺部には縄文時代前期～中期の集落が形成されていたと考えられ、田村遺跡群初の出土例と言える。出土土器はいずれも瀬戸内地域に分布する土器であり、前期の羽島下層式、中期の船元式に並行すると考えられる。検出された自然流路は、縄文中期には南北約40mの幅で、東から南側にかけて流れていたとみられ、その後次第に埋没し、流路幅も縮小して低地状になったと考えられる。ただし低地の状態は縄文時代後期まで続き、遺構は低地部ではなく調査区南の高まりの部分に営まれたようである。またM3区では縄文時代後期の土坑、ピット等の遺構が検出され、包含層中からは尖頭器や打製石斧、石錘などが出土している。



J3区 縄文後期土坑

縄文時代後期の遺構・遺物は、主にH・J1・J3区で検出されている。住居跡は確認されていないが、土坑、ピット、焼土のブロックなどの遺構が検出されている。H4区では土坑と焼土跡が近接して検出されており、遺構はいずれも浅く不定形である。土坑の中には長さ約4m、幅約1m、深さ約40cmの溝状を呈しているものがみられる。またJ3区で検出された土坑からは、埋め甕とみられるものも検出されている。平城式土器がまとまって出土したJ3区の土坑は、長軸47cm、短軸40cm

の楕円形を呈し、深さは約25cmを測る。検出された土坑の埋土には土器の他に、微細ではあるが骨片が認められることから、縄文時代の生活の場であったことがうかがえる。

出土した縄文時代後期の遺物の中で縄文土器には愛媛県御荘町平城貝塚を標式とする平城式、福岡県玄海町上八貝塚を指標とする鐘崎式など、四国西南部や九州地方との交流がうかがえるものが認められ、包含層からの出土土器ではあるが胴部には磨消縄文や沈線による入組鉤手文などの文様がみられる。今回の調査で、鐘崎式土器の出土する後期土器の分布範囲はほぼ確定したと言える。シマイテン地区の東隣にあたるH3区の調査により、H1区から続く縄文時代の包含層は西に行くに従い薄くなり、遺物は希薄となることが明らかになった。また前回調査の行われたシマイテン地区との間では遺構も検出されておらず、完全な土器分布の空白部分が存在しており、両者は時期の異なる別々の集落である可能性が高いと考えられる。またJ1区で出土した土器は平城I式土器であり、高知県中央部の平地遺跡では初の出土となる。このように出土地点によって土器型式の様相が若干異なっており、縄文時代後期の中でも、時期によって瀬戸内あるいは九州、四国西南地域などとの交流は多岐にわたっていたことがうかがえる。

また、H区では石鏃、打製石斧、緑色岩製の定角磨製石斧などとともに100点を越える多量の石錘が出土している。これらの石錘は重さ26.6g~276.1gを測り、そのうち主体となるのは小型の石錘であることから、川漁に用いられたものとみられる。石材は砂岩を中心に結晶片岩など主に物部川流域で採取可能な河原石を利用している。前回及び今回の調査で打製石斧が出土していることも含め、本遺跡群での縄文時代の生業のあり方を考える貴重な資料と言える。



H1区 遺物出土状態



M4区 縄文土器(後期)



M3区 縄文土器(後期)



M3区 石斧(後期)

2) 弥生時代

前回の調査により田村遺跡群は、弥生時代前期初頭から後期にかけての一大集落であることが明らかとなった。弥生時代前期初頭の集落や前期水田跡、中・後期の集落などが検出され、田村遺跡群はもとより、弥生時代の香長平野の様相を明らかにする上でも大きな成果をあげている。

今回の調査成果として、二重または三重の濠を持つ弥生時代前期中葉の環濠集落、中期から後期初頭の集落の中心部が確認され、弥生時代を通して田村遺跡群の全容をうかがえる資料が蓄積できたことがあげられる。現在確認されている弥生時代の遺構は、竪穴住居跡約400棟、掘立柱建物跡約200棟、土坑約2,000基の他、溝、流路、柵列、ピット等であるが、そのうち掘立柱建物跡については、今後の整理作業によってその数はさらに増加すると考えられる。また遺物も多量の土器、石器、青銅器、鉄器、ガラス製品などが出土しており、コンテナケース約5,000箱を数える。

弥生時代前期の環濠集落跡は調査範囲の北東部、C区、D・E区の一部にあたり前回の調査で確認された前期初頭の集落から約500m、前期水田跡が検出されたLoc.23・37・39からは約110m北に位置する。今回の調査で検出された環濠集落は出土遺物からみて前期中葉を中心に営まれた集落とみられる。当時の人々は前期初頭の集落から北へと移動し、環濠集落を形成したのであろう。

環濠集落の範囲は、これまでの調査から東西約130m、南北約220mと推定され、集落の東は自然流路で区画されている。環濠はこの自然流路を利用して掘削されており、流路に対して半円状に巡らせているのが確認された。環濠内の面積は約24,000m²を測るとみられる。前期の遺構は竪穴住居跡、土坑、環濠、溝、自然流路が検出された。そのうち環濠内では200基を超える土坑群が検出されているが竪穴住居跡は検出されず、環濠外において7棟の竪穴住居跡が検出されている。竪穴住居跡の平面形には中央土坑と双ピットを持つ松菊里型竪穴住居も認められる。今後はこれらの遺構の時期の細分化及び前期環濠集落の様相についての検討が必要であろう。環濠集落は前期末には衰退し、集落はさらに北西へ移動するものとみられる。集落移動の状況はI区の調査からも明らかであり、I4区では前期末の大篠式土器の出土する竪穴住居跡や土坑などが検出されている。またI区では中期の竪穴住居跡などが確認され、集落は前期末から中期に北西部へ移動している。

弥生時代中期末から後期初頭になると、中期の集落より南下しD～F、J～L区を中心に集落は拡大する。この時期に集落は最も盛行する。集落内を縦断または横断する溝は、排水施設であるとともに集落を区画する性格もあったと考えられ、中期末から後期初頭の竪穴住居跡はこれら数条の溝に沿って弧状に分布している。さらに竪穴住居跡は直径8m以上の大型の竪穴住居跡を中心に、直径5～6mの中型数棟と直径4m以下の小型の竪穴住居跡が付随し、環状に配置されているようである。これらの竪穴住居跡は建て直しをする際の移動が少なく、重複する住居跡が非常に多い。また掘立柱建物跡は北部(I区)と南部(L区)に集中しており、その多くは倉庫的機能を持つとみられるが、L区では長軸1.8m、短軸1.2mを測る大型柱穴を持つ掘立柱建物跡が検出され、北部で多く検出された溝状土坑が付随する掘立柱建物跡の例などは、特殊な機能を持つ建物ではないかと考えられる。

今回の調査により弥生時代前期から後期まで出揃った感のある田村遺跡群であるが、弥生集落の全容の解明は今後の整理作業の成果が待たれるところである



第5図 遺構全体図 (S = 1/3,000)

[1] 前期

弥生時代前期の集落は、調査範囲の北東部C区、D・E区の一部にあたる。これまでの調査で環濠を巡らせた集落であることは確認されていたが、今回の調査によって集落全体の様相が明らかとなってきた。集落には内濠、外濠が巡り、さらにその外側にもう一重の環濠が巡っていた可能性が高く、三重の環濠となる。また出土遺物からみて、この集落が利用されたのは前期中葉の比較的短期間であったと考えられる。そして遅くとも前期後葉にはこの環濠集落は廃絶し、北西部のD区やI区へと移動したようである。

検出された弥生時代前期の遺構は堅穴住居跡、土坑、環濠、溝、ピット等で、環濠内だけでなく環濠の外にも広がりが見られる。これらの遺構の配置は環濠の内と外で大きく異なる。環濠内では前期の土坑が200基以上と溝、多数のピットが検出されたにも関わらず、当該期の住居跡は現在のところ確認されていない。集落の北部は未調査であるが、遺構の残存状態からみて住居跡は既に削平されているか、環濠内には存在しなかった可能性も考えられる。また環濠外には堅穴住居跡が検出されているが、住居跡の形態や遺物等から環濠集落に先行するものではないかと思われる。

[堅穴住居跡]

前期の堅穴住居跡は環濠外のC2・F3・F4区で、現在7棟確認されている。C2区は環濠集落を区画する自然流路の東側にあたり、円形の堅穴住居跡1棟と方形の住居跡1棟が検出された。円形住居跡は直径約7mを測り、壁際には2個一組とみられるピットが巡る。床面には中央土坑と双ピットがみられることから松菊里型住居と考えられる。中央土坑は平面楕円形を呈し、深さは25cmを測る。中央土坑内から炭化物や焼土などは検出されなかった。その両端の双ピットは中央土坑の外側に隣接している。床面の柱穴から支柱穴は多角形配置であったとみられる。方形堅穴住居跡は調査区の南東隅で検出されており、円形住居跡に伴うものとみられる。F3区では直径約4mの円形堅穴住居跡が1棟確認されている。またF4区では4棟の前期堅穴住居跡が検出されている。そのうち1棟は直径約6mの円形堅穴住居跡で、床面の形態などから松菊里型住居とみられる。中央土坑は平面円形に近く、深さは約44cmを測る。住居の南北の壁際にはピットが各1個付属する。土坑内からは砥石が出土しており、炭化物、焼土などは検出されなかった。また双ピットの1個は土坑内で、1個は土坑からやや離れた位置にある。住居跡からはチャートのチップなどが出土している。小型の堅穴住居跡3棟は直径約4～4.5mを測り、平面形は円形または隅丸方形に近い不定形である。

前回調査された前期初頭の集落では大型住居と小型住居が一对として存在する可能性が高く、今回の調査で検出された前期の堅穴住居跡も大型と小型の住居の組み合わせとなる状況が確認されている。小型の堅穴住居跡は石器製作



C2区 ST201

工場の可能性も考えられ、竪穴住居跡の形態及び配置などから居住・貯蔵空間と工場などの作業空間の違いが読みとれるのではないかと考えられる。F4区で検出された松菊里型住居の場合は周辺に小型の竪穴住居跡3棟とやや時期の異なる楕円形の土坑群などが検出されており、詳細については今後の整理作業での成果が待たれるところである。これら前期の竪穴住居跡は、中・後期にみられるような住居跡同士の切り合い関係や拡張などの痕跡は



I4区 ST420

みられず、短期間に廃棄されたものであろう。また形態からみて前回調査で検出された前期初頭のものと同様であり、環濠集落に先行する時期と考えられる。

I4区の調査では、これまで資料の乏しかった前期末の大篠式土器を伴う竪穴住居跡5棟が確認された。平面形は隅丸長方形とみられ、長軸約5m、短軸約3m、深いもので50～60cmを測る。床面は緩やかな皿状を呈する。住居跡4棟の床面中央部には焼土塊が確認され、炉として使用された可能性が高い。前期末の集落はI区を含めた田村遺跡群北西部に展開していると考えられ、前回調査で検出された東端部のLoc.10Bには分村した小規模な集落が存在している。

[土坑]

前期前葉～後葉にかけて機能したとみられる環濠の内側では、200基を超える当該期の土坑が検出された。これらの土坑群は出土地点によって分布に粗密があり、外濠の外側及び外濠と内濠の間では分布密度はやや低く、内濠の内側では分布密度が高い傾向がみられる。そのため内濠の内側では前期土坑の切合いもみられる。土坑の平面形は、方形、隅丸方形、楕円形、円形があり、断面は袋状、逆台形状、播鉢状のものなどがみられる。深さは後世の削平の影響があるため、調査区によって様々である。また、これらの土坑群の長軸方向はいくつかのグループにまとまるようである。A群は長軸方向が真北から西 7° ～東 10° の間に収まるもので、方形または隅丸方形の平面プランを持つものが多く、大きさは長軸1～3m、短軸1m以下である。B群は軸方向が真北より



C1区 SK1001



B1区 SK119

西に59～69°傾くもので、平面形は方形または隅丸方形のものが多く、長軸2～4m、短軸1～2m前後を測る。この中には袋状土坑も含まれる。C群は軸方向が真北から東に約21～36°傾くもので、平面方形プランを呈するものが多く、長軸2～3.5m、短軸1～2mの土坑である。C群の中には比較的大型で床面にピットなどが検出された土坑が含まれる。これらの各軸方向の土坑群が時期差や機能などによって意図的に配置されたものかは、これからの整理作業によって検討していくことにより明らかになると考えられる。また検出例はやや少ないが、環濠外にも前期の土坑は確認されている。

土坑内からは多量の弥生前期土器とともに、大陸系磨製石器をはじめとする石器類や焼けた獣骨片などが出土した。土器では、壺、甕、鉢、高杯、蓋、手捏土器、ミニチュア土器などがみられ、量的には壺、甕が最も多く、いずれも遠賀川式土器であり縄文晩期系の土器はほとんど残存しない。しかしながら、前期土坑から石棒が出土するなど、縄文系遺物も若干ながら認められる。また石器類では大陸系磨製石器類が多く出土しており、農具類(石鎌、石庖丁)、工具類(太型蛤刃石斧、扁平片刃石斧、柱状片刃石斧等)、武器類(磨製石鎌、石剣)などバラエティに富んでいる。また打製石鎌や石錐などもみられる。いくつかの土坑では埋土中から多量のチャート製の楔形石器、石錐、チップなどが出土しており、内濠内部を中心に石器製作が行われていたと考えられる。土器についても、ほぼ完形に近い形で出土する土坑や、多量に土器が出土しても断片的にしか接合ができない例などもあり、土坑の機能や廃絶方法などに違いがあるものと考えられる。

B1区のSK119では、前期の比較的古い段階の遠賀川式土器が出土している。土坑は長軸3.55m、短軸0.63m、深さ71cmを測る隅丸長方形であり、長軸はN-69°38'07"-Wである。断面はU字形を呈する。SK119からは2点の甕が出土しており、1点はバケツ形、1点は砲弾型の胴部を持ち、口縁端部に刻目を施している。

E6区のSK636は長軸2.04m、短軸1.49m、深さ77cmを測る方形の土坑であり、長軸はN-52°



E 6 区 SK636



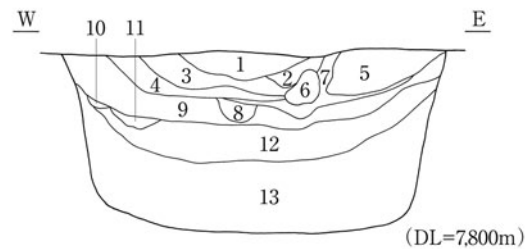
C 4 区 SK4149

41' 45"-Wである。土坑内からは遠賀川式土器の壺1点と甕2点が出土している。壺には木葉文が篋描きで施文されており、基底面よりやや上面で完形に近い状態で出土している。

C4区のSK4048は長軸2.18m、短軸1.23m、深さ90cmを測る方形の土坑であり、断面は逆台形を呈する。長軸方向はN-61° 49' 17"-Wである。土坑内からは多量の出土遺物が出土しており、遺物は深さ約40cmのレベルに集中し、基底面までみられた。壺、大型壺、甕、高杯などの土器とともに石器、獣骨片なども出土している。中でも大型壺は土坑の基底面から壁面にへばり付くような状況で出土している。またSK4149からも大量の遺物が出土している。



C4区 SK4048



1. 黒褐色土(シルト。焼土混)
2. 明黄褐色土(シルト)
3. 暗灰黄褐色土(シルト。焼土・炭化物混)
4. 黒褐色土(シルト。焼土・炭化物・遺物混)
5. 褐色土(シルト。焼土・炭化物混)
6. 黄褐色土(シルト。炭化物混)
7. 褐色土(シルト。焼土・炭化物混) 埋土は5と同じ
8. 黒褐色土(シルト。焼土混) 埋土は1と同じ
9. 黒褐色土(シルト。黄褐色シルトが斑に混)
10. 明黄褐色土(砂質シルト)
11. 灰黄褐色土(シルト。炭化物混)
12. 褐灰色土(シルト。炭化物・多量の土器混)
13. 黒褐色土(粘性シルト)

第6図 C4区 SK4048南壁セクション

[環濠]

調査範囲の北東部で確認された前期の集落を画す環濠は、今回の調査で三重に巡る可能性が強くなった。環濠集落の東側には自然流路が流れており、環濠はこの流路に取り付き、その西側に半円状に巡らしている。環濠の北側部分は等高線に沿って、南側部分はそれに逆らって掘削されている。内濠と外濠の間隔は約30m、外濠とさらに外側の環濠と考えられる溝との間は約50mであり、これらはほぼ並行に巡っている。また内濠内部には直線的に走る東西方向の溝も1条確認されており、環濠内の区画溝とも考えられる。環濠集落の範囲は今回の調査と前回調査で検出された内濠の北限と考えられる溝から推定して、約24,000m²ほどになると考えられる。

内濠は検出長約148mで、前回調査と合わせると推定228mに及ぶ。幅員は約2m、深さ約1mを測るが、現在

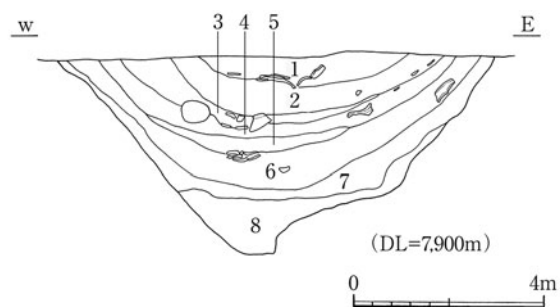


C1区 内濠

の検出面からすれば、かなり削平されているものとみられる。断面は南部分ではU字形であり、西側部分ではV字形を呈している。埋土の土層観察から、内濠の中層までは比較的早い時期に埋まり、その後一定の安定期間が過ぎた後に完全に埋められたようである。内濠の出土遺物が埋土中層に集中するのも環濠が埋まる状況を示しているものとみられる。出土遺物には土器、紡錘車などの土製品、石器などがみられるが、土器は一個体がそのまま出土する例は少なく、多くの土器については、出土状態からの接合関係はつかめない。



E5区 内濠セクション



1. 黒褐色土(シルト)
2. 暗褐色土(シルト、黄褐色粘性シルト混)
3. 暗褐色シルトブロック
4. 黒褐色土(シルト、埋土4との境にシルト質砂混)
5. 黒褐色土(シルト、埋土5との境にシルト質砂混)
6. 黒褐色土(シルト)
7. 黒褐色土(粘性シルト、褐色シルトブロック混)
8. 暗褐色土(粘性シルト、褐色粘性シルトブロック・黄灰褐色砂質シルト混)

第7図 内濠南壁セクション

外濠は検出長約40m、幅員約1.5m、深さ約1mを測り、断面は鋭いV字形を呈する。外濠も内濠同様に後世の削平の影響をかなり受けたとみられる。外濠は溝の外から埋まっていったことが土層観察から推測された。遺物は外濠の埋土中層から上層にかけて出土しており、比較的一個体がまともに出土するものが多く、ほぼ完形に近い壺も出土している。出土土器からみれば内濠と外濠はほぼ同時期に機能し、廃絶されたと考えられる。また前期土器とともに管状土錘約36個が



E2区 外濠セクション



C5区 外濠

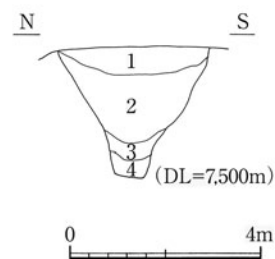
まとめて出土しており、当時の生業を考える上で貴重な資料となった。

平成10年度の発掘調査では、それまで確認されていた外濠のさらに外側に三重目と考えられる環濠が巡る状況が確認された。環濠と考えられる溝は検出長約43m、幅員0.8m、深さ50cmを測り、断面はV字状を呈している。検出面は周辺遺構の状況からみて、後世の削平を受けているものと考えられた。埋土の土層観察からみて、この環濠は人為的に埋められた状況であり、壺、高坏等の出土遺物から、これまでに確認された二重の環濠よりも先行する可能性も考えられる。

前期の環濠集落は北部九州、畿内を中心に確認されており、環濠の構造や機能については諸説みられる。今回田村遺跡群で検出された環濠は削平のため不明な点も多いが、その性格、機能等については集落のあり方も含めて、さらに検討を進めなければならない。



B4区 外濠セクション



1. 暗灰褐色土(シルト)
 2. 黄灰褐色土(シルト。黄色シルト、灰褐色・黒色粘土ブロック混)
 3. 暗灰色土(粘砂土。埋土2との境に砂入る)
 4. 褐黄灰色土(粘土)
- 遺物は埋土2の上面に入る

第8図 外濠西壁セクション



大型壺

〔2〕中・後期

田村遺跡群では弥生時代前期初頭から集落は確認されているが、集落が最も盛行するのは弥生時代中期末～後期前半にかけての時期である。特に今回の調査では、中期後半～後期前半の集落中心部の調査が行われており、393棟の竪穴住居跡、約184棟の掘立柱建物跡、2000基を越える土坑、溝跡、自然流路、多数のピット等が検出されている。集落全体としては、前回調査の竪穴住居跡60棟、掘立柱建物跡約14棟と合わせると400棟を超える竪穴住居跡が検出されたことになり、その9割が当該期のものである。

集落は、前期末の段階には環濠集落からさらに北部に移動したとみられ、中期前半までは引き続き北部に位置していたものと考えられる。昭和57・58年に行われた北部の荒堀地点の調査では、中期の竪穴住居跡、溝跡、ピットなどが検出されており、出土遺物からみれば中期初頭と中期末の二時期の遺構が存在するようである。またナカス地区の調査では、遺構は未検出であったが、弥生時代前期中葉から後期初頭にかけての遺物が出土している。今回の調査でも、北から流れる溝や自然流路内に前期末から中期前半の遺物が多量に出土しており、北部に集落が存在することを裏付けていると考えられる。

中期後半になると、集落は再び南下し、今回の調査対象地に立地している。調査区の中ではI区、K区などの田村遺跡群北西部やF区では中期後半とみられる遺構・遺物が出検されており、北部のI4区では中期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑などが検出されている。またI2区では中期後葉とみられる焼失住居跡が検出されている。その中の2棟は切り合い関係にあり、一辺約4mの方形住居跡が直径約10mの円形大型住居跡を切っている。これらの竪穴住居跡は、どちらも出土遺物



第9図 中・後期遺構全体図 (S=1/5,000)

等からみて中期後半に建てられているが、時期が下るにつれ住居の平面形は円形から方形へと変化するようである。またI2区では同時期の溝状土坑を伴う掘立柱建物跡が確認されている。

弥生時代中期末から後期にかけての集落の中心はさらにやや南下しており、竪穴住居跡群が密集している。今回の調査によってその中心部の調査が終了したと言えるが、当該期の遺構はほとんどの調査区で確認されており、特に遺構の密度が高いのはD・E・F・J・K・L区である。竪穴住居跡群は集落を画する大溝に沿って一定の範囲に集中しており、検出された住居跡のほとんどでは切り合い関係がみられる。中には5棟ほどの住居跡の重複もみられ、基本的には同じ場所での建て替えが行われており、周辺部への拡張はみられない。この時期には大型の竪穴住居跡が目立つようになり、大型住居跡を中心とした単位で竪穴住居跡群が営まれたと考えられる。またL区では竪穴住居跡が、先行する大型の柱穴を持つ掘立柱建物跡を切っているのが確認されており、時期によって竪穴住居と掘立柱建物の分布に違いがみられ、集落内における空間利用に変化があったのではないかと考えられる。

掘立柱建物跡は現在約184棟が確認されているが、今後の整理作業によって最終的には300棟を越える掘立柱建物が復原されるとみられる。掘立柱建物跡は竪穴住居跡とは異なる地点に集中しており、大きく北部(I・J区)、中央部(K3区)、南部(L区)の3ヶ所に分布している。北部には溝状土坑を伴う掘立柱建物群、中央部にはやや小型の掘立柱建物群、南部には大型の柱穴を持つ掘立柱建物跡がそれぞれ検出されている。

土坑については、竪穴住居跡の集中する区域から検出される例が多く、特に溝状土坑については掘立柱建物跡に付随しており、竪穴住居跡に付属する可能性の高いものも存在する。また、少数ではあるが土坑墓と考えられるものも存在しており今後の検討が必要である。

田村遺跡群の集落構成の中で溝跡と自然流路は重要な役割を持つと考えられる。現在366条検出されている溝跡の中で、田村の集落を分断する大きな溝はすべて中期から後期にかけて機能したと考えられる。これらの溝跡は、東西方向に集落を横断するもの、北から西に向かって弧を描くもの、集落を縦断し南で自然流路と合流するものなどがみられる。その中でD1区からQ2区に繋がる溝跡の検出長は約445mを測る。これらの溝跡は排水施設などとして利用されるとともに、集落を画する役割もあったと考えられる。特にL区では溝を境として北側には竪穴住居跡、掘立柱建物跡などの遺構が密集するのに対し、南側では弥生時代の遺構は検出されておらず、この溝跡が中期末～後期前半の集落の南限とみられる。また集落の南限を画す溝跡ほど規模は大きくないものの、P区・Q区では北から南に流れる溝跡が確認されており、やはりこの溝跡以西では弥生時代の遺構は確認されておらず、集落の西限を画す溝であったと言えるであろう。溝を境とした集落の南部及び西部は水田等の生産域と考えられ、溝は用水としての機能も持っていたのではないかとみられる。さらに溝の基底面には小ピットや小礫などが集中的に検出される部分があり、何らかの水利施設が存在していたと想定され、溝の機能を考える上で重要である。

またB区・C区では、前回調査で検出された自然流路の続きが検出された。この自然流路は弥生時代を通して機能していたとみられ、前期の環濠をはじめ、中期～後期の溝跡も流路に取り付いており、集落の水の確保の点からみても重要な遺構と考えられる。

(1) 竪穴住居跡

検出された中期末～後期初頭の竪穴住居跡は、D・E区、F・K・L区に集中しており、直径8m以上の大型、直径5～6mの中型、直径4m以下の小型の3種類に分けられる。また大型及び中型の住居跡はすべて円形であるが、小型の住居跡には円形と方形の両者がみられ、規模と形態には相関関係が認められるようである。大型住居の床面にはしばしば同心円状に巡る壁溝が検出されており、複数回にわたる拡張の結果、大型になったものと考えられる。また大型の竪穴住居跡にはベッド状遺構の伴うものも検出されている。

住居跡の配置には一定のパターンが認められており、大型住居跡を中心として中型住居跡数棟とその周辺に小型住居跡が付随するものである。これらの住居群は環状に配置されているようであり、集落内に数カ所の住居跡群の単位がみられる。また出土遺物の中でガラス小玉や鉄製品などの多くは大型住居跡から出土しており、中型住居跡との出土遺物の差からやはり大型住居跡は集落内の有力者の住居であったと考えられる。B3区では大型住居跡の中央ピットとみられる土坑から有鉤銅釧片が1点出土しており、L2区の直径約8mを測る大型竪穴住居跡からは200点を超えるガラス小玉が出土している。ただしE1区やJ4区では中型及び小型の竪穴住居跡からも破碎鏡や絵画土器片、鉄斧が出土しており、集落内における住居跡の分析には、その規模や構造とともに出土遺物の内容も加味して詳細な検討を今後の整理作業の中で行っていかなければならない。

またこの時期の住居跡で特徴的なのは焼失住居の増加であり、住居跡の床面に焼土や炭化材が認められ、屋根に葺かれた萱などの炭化物が残るものも検出されている。I2区では、直径約6mの円形焼失住居跡から、炭化材とともに完形の壺5点が出土しており注目される。K2区では方形の焼失住居から土器製作のために持ち込んだとみられる粘土塊が出土しており、他の焼失住居では炭化米の出土も確認され、住居焼失の状況を考える貴重な手掛かりと言える。



L 2 区 ST201



I 2 区 ST203



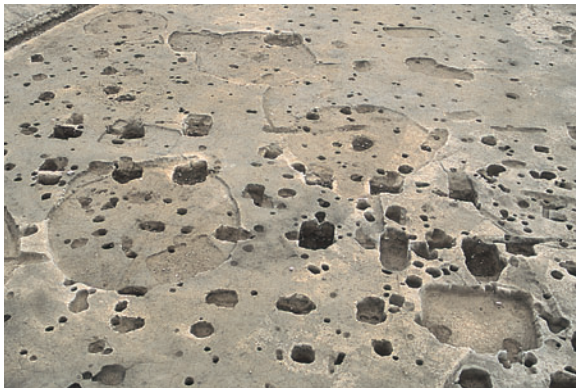
K 2 区 ST206

(2) 掘立柱建物跡

現在確認されている掘立柱建物跡は184棟を数えるが、今後の整理作業により最終的には300棟前後の復原が可能とみられる。検出された掘立柱建物跡は1間×2間から1間×4間の規模のものであり、現在のところ梁間2間以上の掘立柱建物跡は確認されていない。



I 2 区 SB205、溝状土坑



L 3 区 SB318・319

掘立柱建物跡はほとんどの調査区で確認されているが、集中する区域は調査範囲の北部、中部、南部にあり、全体的には竪穴住居跡と同じく弧状に配置されているようである。北部のI・J区では溝状土坑を伴う掘立柱建物跡が、中央部のK区ではやや小型の掘立柱建物跡約20棟が一群となり検出され、南部のL区では大型柱穴の掘立柱建物跡を含めて約30棟が確認されている。掘立柱建物跡は、機能的にみれば倉庫的な性格を持つものとみられるが、北部のK・I区や、南部のL区では溝状土坑を伴う掘立柱建物跡が多く検出されており、中には特殊な用途に使用された建物も存在するものと考えられる。また掘立柱建物跡の中には柱を抜き取った後に高杯などの土器が埋められたとみられる柱穴も存在することから、建物の廃棄に伴う祭祀的な行為が行われた可能性も考えられる。

また南部のL3区では、1間×2間の大型の柱穴を持つ掘立柱建物跡が、東西方向に2棟並んで検出されている。この2棟の掘立柱建物跡は梁間約3.2m×桁行約5.6mとほぼ同規模であり、床面積も約18m²と比較的小型の掘立柱建物跡であるが、長径約1.8m、短径約1.2m、深さ約1mの大型の柱穴からみれば、櫓のような構造の建物、または重量物を支える構造を持つものであった可能性が高い。

柱穴の埋土断面に残された柱痕から復原される柱の直径は約40～50cmと推定され、他の掘立柱建物に比較すれば、規模は余り大きくないが太い柱を持つ特殊な建物であったと考えられる。またこの2棟には及ばないが、一辺1m以上の柱穴を持つ建物群もある程度集中しており、竪穴住居跡との切り合い関係からみて、中期後半には、集落の南端部に位置するL区は掘立柱建物が集中する特殊な空間であったのではないかと考えられる。



K 3 区 掘立柱建物跡群

(3) 土 坑

中期～後期の土坑は、現段階では約1500基が確認されている。土坑の性格や配置などはこれから検討していかなければならないが、堅穴住居跡集中部に多数の土坑が認められることから、大部分は住居に伴う性格のものであると考えられる。

土坑の形態は主に平面方形、隅丸方形、溝状のものがみられる。方形及び隅丸方形の土坑は長軸3m以内、短軸2m以内のものが多く、遺存状態は様々で、深さ50cmを越えるものから10cmに満たないものまで存在する。多くは堅穴住居跡の周辺部で検出され、土器の他に焼土とともに炭化米や炭化種子が出土する土坑もみられることから、貯蔵穴として利用されるものも多かったと考えられる。炭化米の出土したL2区の土坑は、上面から完形の壺などが検出され、炭化米は基底面付近から出土した壺の底部から検出された。またD1区では、方形の土坑から人面動物形土製品が出土しており、貯蔵穴以外の機能も考えられ、ほとんど遺物の出土しない土坑の中には木棺直葬の土坑墓も存在する可能性も考えられ、墓域については今後のさらなる検討が必要である。一方溝状土坑は全長9m以下、全幅1m未満のものがほとんどであり、掘立柱建物跡に伴う例が多く認められる。土坑内からは完形に近い壺、甕、高杯などが出土しており、祭祀に関連する遺構とも考えられているが不明な点が多い。特殊なものとして、溝状土坑からは3点の絵画土器の内2点が出土している。F1区の溝状土坑からは掘立柱建物を描いた壺が、J1区からは動物を描いたとみられるミニチュア壺が出土している。また今回の調査ではI2区において中広形銅矛の埋納坑が検出されており、過去に出土したカリヤ地区の銅矛なども含め、集落内における青銅器埋納の状況が確認されている。



I4区 SK428



L2区 SK222(炭化米)



D1区 SK1130(炭化種子)



D1区 人面動物形土製品



F1区 絵画土器

(4) 溝跡・自然流路

今回の調査で確認されている溝跡366条の多くは中～後期のものと考えられ、特に調査区をまたいで流れる5条の大規模な溝跡は、当該期の集落に関連して機能したものとみられる。北部のI・N区で検出された溝跡は、ほぼ現況地割と並行して東西方向に延びており、東部では北方向に曲がっている。D・I・J・O区を流れる溝跡は、西部のO区でさらに南を流れる溝と合流するようである。D区からE・F・K区を流れ、O区で合流するとみられる溝跡は、総検出長365m、幅3～4m、深さ60～70cmを測る。この溝跡は北から東へと、K区の礫層を掘り抜き、極端に曲がっていることから環濠を意識して掘削されたものと考えられ、溝跡の西部には堅穴住居跡が集中する。さらに東側で検出されている溝跡は、D・E・F区を縦断しL・Q区へと続き、集落の南限を画すものであり、総検出長約445m、幅2～3m、深さ約1mを測る規模の大きな溝である。F4区中央部では溝の基底面から杭列と多量の小礫が検出されており、堰状遺構の存在が考えられる。L1区においても小礫が集中する部分が検出されており、近接してコの字状の溝状の土坑もみられることから、ここにも水利に関連した施設があったと考えられる。またこの溝跡の東にも北から南に調査区を縦断し、自然流路に取り付く溝跡が検出されている。

これらの溝跡の埋土は砂利、砂、シルトの互層堆積であり、断面観察から一定量の水流通ったものと考えられる。また遺物は主に砂礫層から出土しているが、中には完形の土器を一括廃棄したものもあり、溝跡の機能と埋没した状況は各々異なるとみられる。

自然流路は前回調査でも検出されているが、今回の調査では北部のB・C区でその延長部分が確認された。検出長は約120m、幅約20m、深さは1.5～2mを測る規模の大きいものである。この自然流路は弥生時代前期に機能していたとみられ、C区では前期環濠が取り付いている。中期になると流路はほぼ埋没しており、上面に堅穴住居跡が確認されている。B4区の調査では流路の西側肩部が検出され、弥生時代中～後期の土器とともに、一段低いテラス状の部分からは前期末～中期初頭の土器も出土している。



B1区 SR101



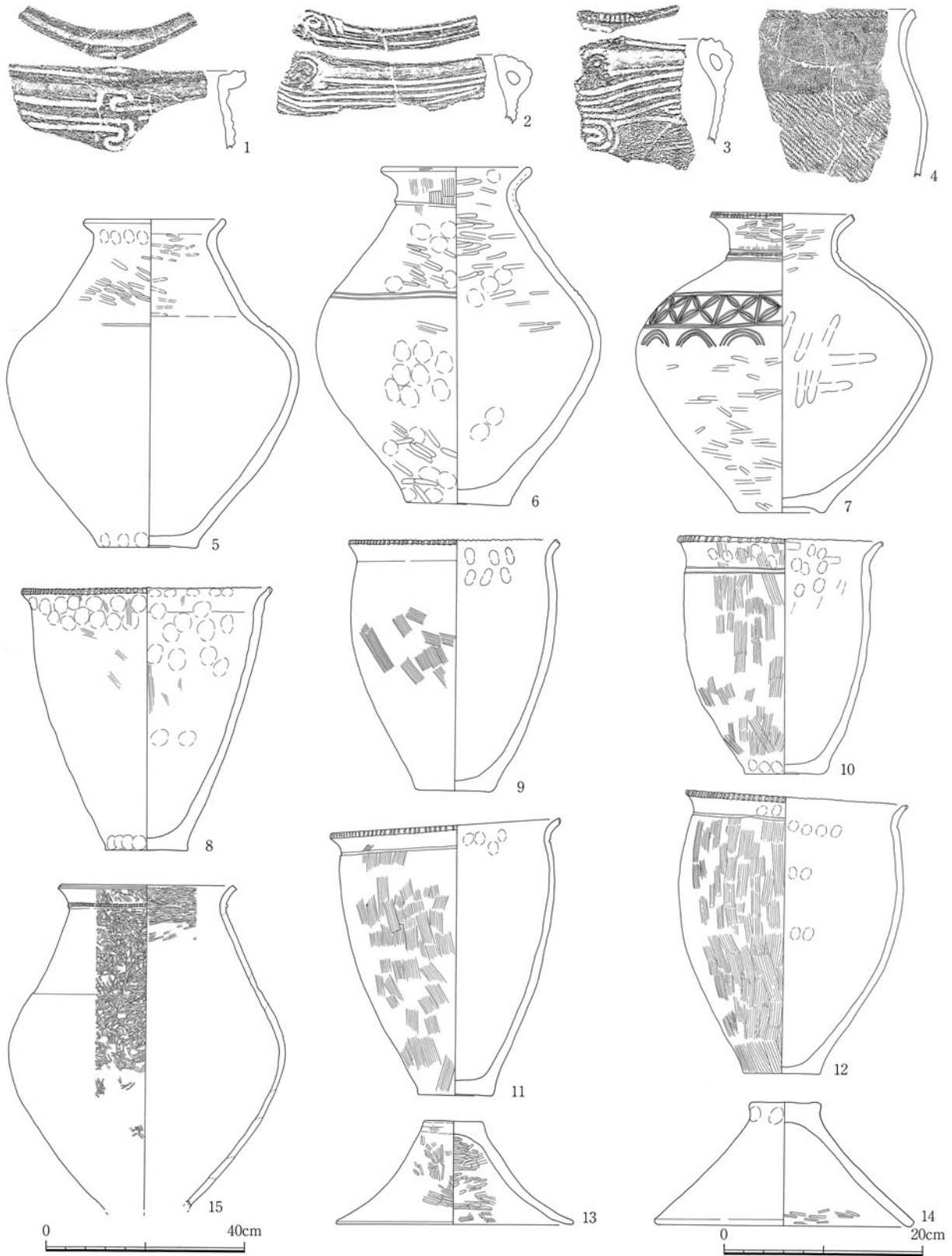
F4区 SD401



F4区 SD401

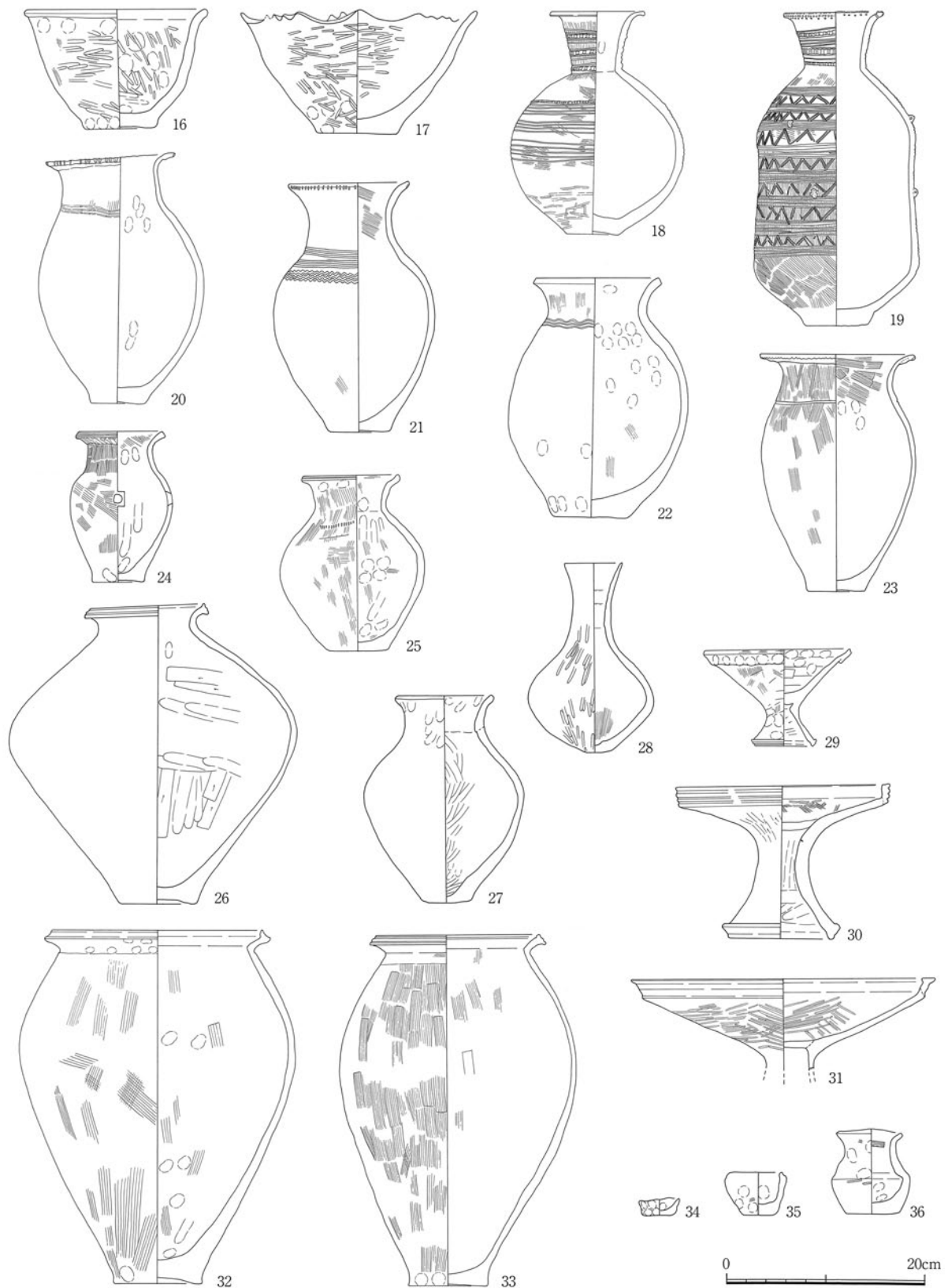


L1区 溝跡



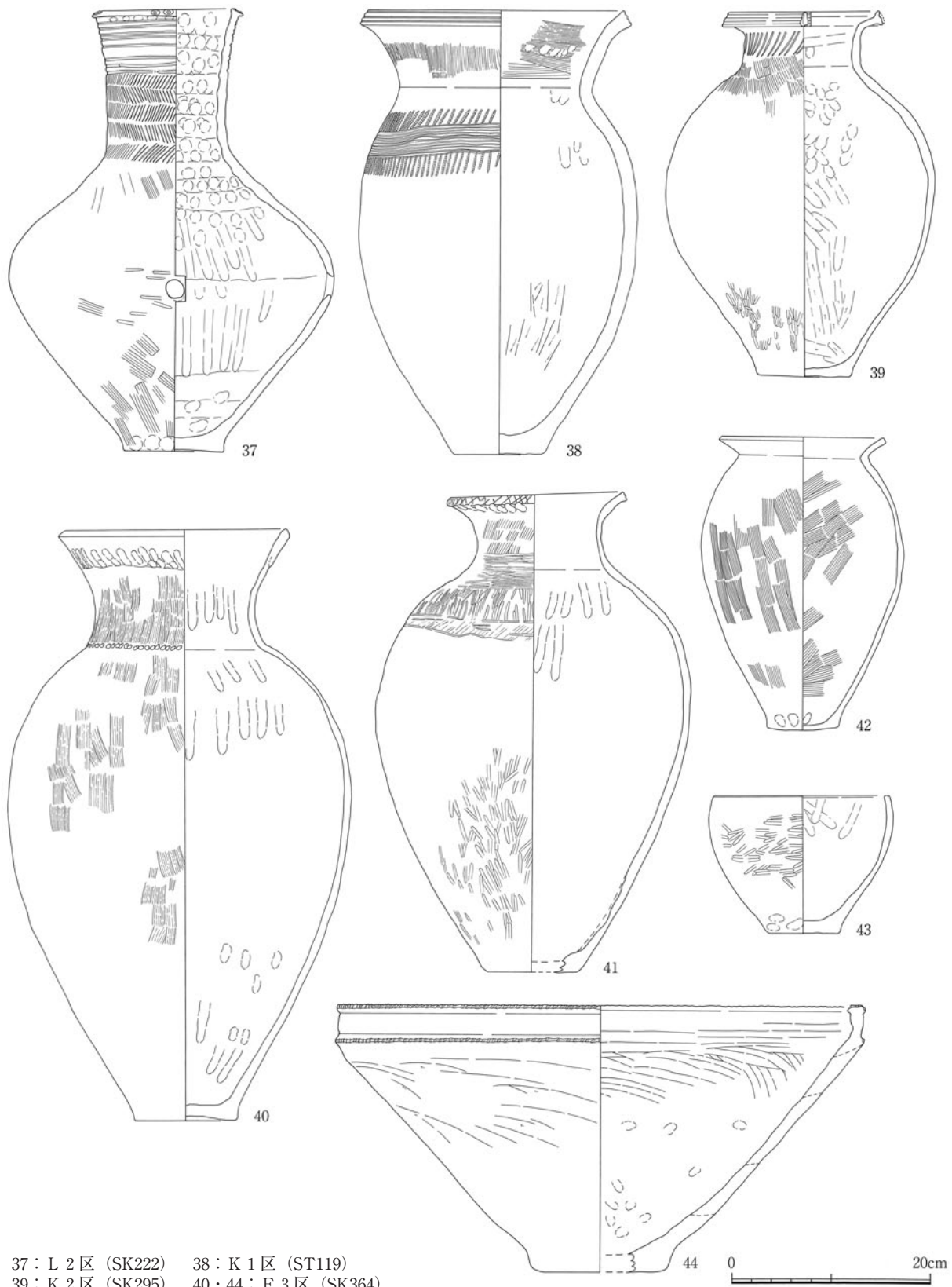
1～4：H 1区（包含層） 5・15：C 4区（SK4025） 6：C 1区（SK1002） 7・10・12：E 6区（SK636）
 8・9：B 1区（SK119） 11：C 4区（SD101） 13：C 1区（SK1036） 14：C 4区（SK4024）

第10図 遺物実測図1



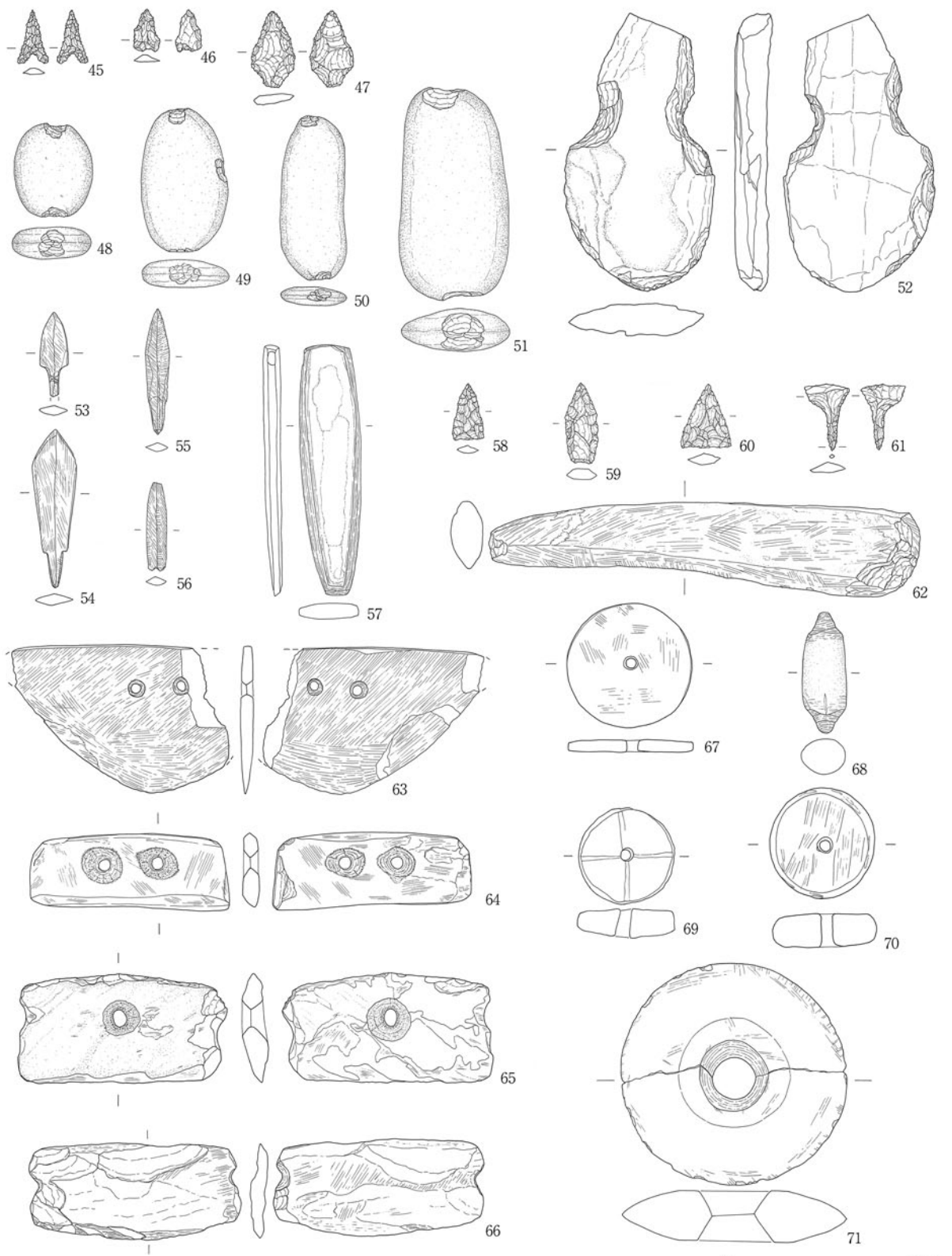
16・17：C 4 区 (SK4024) 18・19：E 6 区 (SX601) 20~22：B 1 区 (包含層) 23：B 1 区 (SK167)
 24：C 3 区 (包含層) 25：B 1 区 (SK173) 26：B 1 区 (SK169) 27：C 4 区 (SK4035) 28：E 3 区 (SR302)
 29：C 2 区 (SD204) 30：F 3 区 (SK325) 31：F 3 区 (ST302) 32：K 2 区 (SK201) 33：K 2 区 (SK295)
 34：C 4 区 (SD101) 35・36：C 4 区 (SK4008)

第11図 遺物実測図2



37 : L 2 区 (SK222) 38 : K 1 区 (ST119)
 39 : K 2 区 (SK295) 40・44 : F 3 区 (SK364)
 41 : F 3 区 (SK306) 42 : F 1 区 (SD102)
 43 : F 3 区 (ST107)

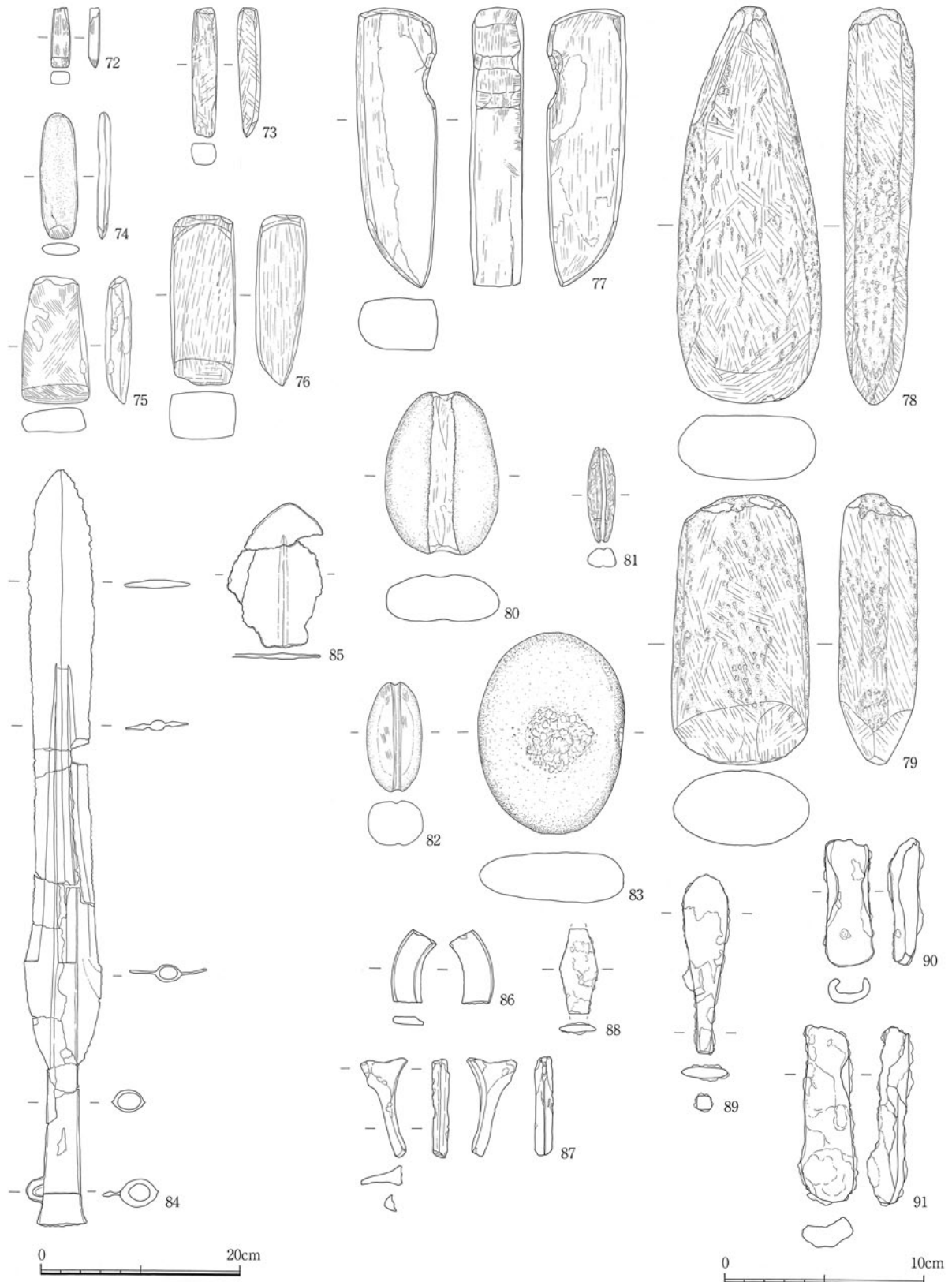
第12図 遺物実測図 3



0 10cm

- 45: H 1 区 (SK105) 46~52: H 1 区 (包含層) 53: E 5 区 (SD502)
 54: C 4 区 (SK4025) 55~57: C 1 区 (SK1061) 58: K 2 区 (ST221)
 59·60: K 2 区 (SK281) 61: C 5 区 (P5141) 62: C 1 区 (SK1001) 63: E 6 区 (SR602)
 64: K 2 区 (ST201) 65: L 2 区 (ST202) 66: K 1 区 (SD114) 67·70: C 1 区 (SD105)
 68: E 6 区 (SR601) 69: C 4 区 (SK426) 71: C 3 区 (包含層)

第13图 遺物実測図 4

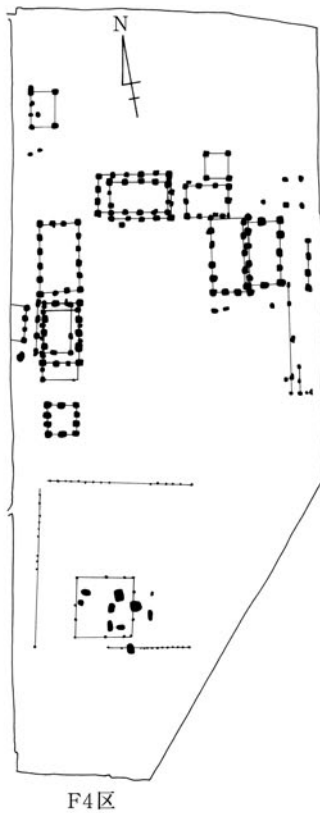
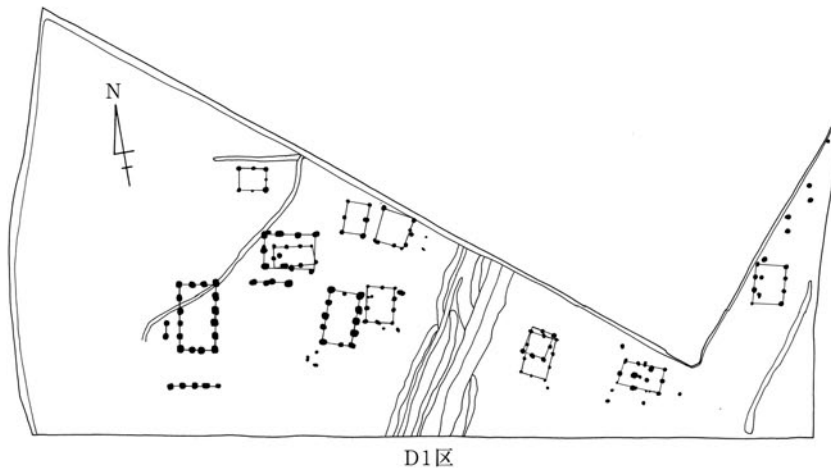


- | | | | |
|--------------------|--------------------|----------------------------|--------------------|
| 72 : K 2 区 (ST205) | 73 : D 1 区 (SR101) | 74 · 79 · 80 : C 3 区 (包含層) | 75 : K 1 区 (ST126) |
| 76 : K 1 区 (ST120) | 77 : E 4 区 (SK405) | 78 : C 1 区 (SK1034) | 81 : F 4 区 (包含層) |
| 82 : K 2 区 (ST220) | 83 : C 1 区 (SD105) | 84 : I 2 区 (SK2314) | 85 : E 7 区 (SR703) |
| 86 : E 1 区 (ST102) | 87 : B 3 区 (SK351) | 88 : J 4 区 (ST412) | 89 : E 5 区 (P5088) |
| 90 : J 1 区 (ST105) | 91 : K 2 区 (ST220) | | |

第14図 遺物実測図 5

3) 古 代

田村遺跡群の所在する香長平野は、条里地割が認められる地域として、これまでに比較的多くの研究が進められてきた。現存している条里的地名や、『長宗我部地検帳』などを基とした文献史学からのアプローチとともに、発掘調査によっても香長平野における古代の様相は徐々にではあるが明らかとなっている。



田村遺跡群周辺では、昭和54年度に空港拡張に伴う調査の一環として周辺の条里遺構分布調査が実施されている。そして翌年から行われた発掘調査では、北西部の寺の前地区を中心に古代の掘立柱建物跡が22棟検出されている。建物群は大きく8～9世紀前半のものと10～11世紀の二時期に分けられるようである。また建物の配置は主屋とみられる建物を中心にコの字状に配置され、周辺には倉庫群と考えられる建物が存在する。検出されたこれらの建物群は田村庄の存在からみて荘園関連のものであった可能性が示されている。

今回の発掘調査では、D・F・I・N区を中心に古代の遺構・遺物が検出されている。F4区は調査範囲の東部にあたり、前回調査で古代の

第15図 D1区・F4区掘立柱建物跡配置図
(S=1/1,000)

掘立柱建物跡が検出された寺の前地区から約200m西にあたる。古代から中世にかけての遺物包含層が良好な状態で残存していたため、当該期の遺構が数多く検出された。特にF4区の北部では、整然とコの字状に配置された掘立柱建物跡14棟が確認されており注目される。これら掘立柱建物群の柱穴は一辺90～100cm前後の方形を呈し、多くの柱穴には大型で扁平な河原石が礎板として使用されている。14棟のうち最も大きなものは3間×5間であり、梁間5m×桁行9～10mの規模に及ぶ。F4区の建物配置は、北側正面の主殿にあたる位置に東西棟の建物が検出され、主殿に直交するように3間×5間の南北棟の脇殿とみられる建物が左右対称に配置されている。西側の並びの南端には、全ての柱穴の基底面に礎板を据えた小型の倉庫風建物が認められる。また中央部には前庭部が大きく取られており、全体的にみれば強い規格性のもとに配置された官衙的な建物群と言える。また建物の切合関係からみて、中央の東西棟の建物は、2間×5間、3間×5間、2間×3間と規模を変えながら三度にわたる建て替えが行われていたようである。また両側の南北棟も2～3回の建て替えが行われており、いずれの建物も香長平野の条里方向(N-11°-E)に沿っており、真北から東に約10°ずれるという一定の方向性がみられる。遺物は古代の掘立柱建物跡及び土坑内から、主に土師器、須恵器などの供膳具が出土している。これらの遺物は8世紀後半から9世紀前半のものと考えられることから、建物群の時期もそれに対応すると考えられる。また同時期の掘立柱建物群は寺の前地区で多く検出されており、前回調査の成果を含めた古代の田村遺跡群の復原が待たれるところである。



F4区 P4092



F4区 掘立柱建物跡

F4区から約100m北のD1区でも古代の掘立柱建物跡12棟、溝跡、南北に流れる流路が検出されており、掘立柱建物跡については今後の整理作業によって、さらに増える可能性がある。建物はF4区でもみられたコの字状の配置になっており、東側に2間×4間、西側に3間×5間、北側には2間×3間の建物が配され、南に向かって開いている。建物の柱穴は一辺80～100cmを測る方形で構成されるものと、直径約50cm前後の円形のもの認められる。これらの建物跡に切り合い関係は認められないが位置的には重複しており、時期的には二時期以上と考えられる。また建物の棟方向でも真北から10°前後東に傾くものと、真北から17°前後東に傾く二群の建物群がみられる。D1区で検出された古代の遺構は、北端の調査区であるI4区の調査でも確認されており、さらに北に広がるものとみられる。

平成12年度に調査されたI4区でも古代の掘立柱建物跡3棟と、それに伴うとみられる柵列1条が検出されている。これらの建物跡の柱穴は約1m前後の方形を呈し、基底面に河原石の礎板が認められるものも存在する。また柵列の柱穴基底面には3cm前後の小礫が敷かれたような状態で検出されている。検出された建物跡や柵列は、他の調査区の古代遺構と同様に地割に沿った方向で建てられており、田村遺跡群全体として条理地割を基準とした配置が行われているようである。



D1区 掘立柱建物跡完掘状態

今回の田村遺跡群の発掘調査で検出された掘立柱建物跡は29棟に及び、南北4町の範囲にまたがって検出された。前回調査の22棟と合わせると、田村遺跡群では51棟の掘立柱建物跡が検出されたことになる。また掘立柱建物跡以外にも、I2区では東隣のD1区から続く弥生時代の溝跡の上面に重複して検出長約14m、幅約9mを測る古代の集石遺構が検出された。時期的には出土した須恵器から9世紀代であり、古代の道路状遺構である可能性も考えられる。またI4区から約80m西のN3区では、遺物がほとんど出土しないので明確ではないが、古代とみられる溝跡が東西方向に7条確認されている。



I2区 集石遺構

高知県内において、田村遺跡群のように面的に大規模な調査が行われている例はなく、古代の遺構を考える上では非常に重要な調査成果であり、条理地割や田村庄などの荘園との関係も含め、香長平野の古代の様相の復原が期待される。



I4区 SB414、SA401

4) 中・近世

南国市田村は古代以来荘園として発達し、中世においても田村庄として文献に登場する。田村遺跡群の北に隣接して土佐国守護代細川氏の居館である田村城館跡が、また南へ約750m下った滑走路の南側には、国人千屋氏の居城である千屋城跡が所在する。田村城館跡はこれまでの研究によって、細勝寺を内山下寺院として城内に持ち、平城形式をとる複郭式城館であることが推定されている。そして城跡の規模は4町5反余りと土佐国内では最大規模の城跡だったとみられる。一方千屋城跡は昭和58年に詰の発掘調査が行われ、部分的ではあるが城跡の様相などが明らかにされている。

また田村城館跡と千屋城跡に挟まれた地域に当たる田村遺跡群では、前回の調査で環濠屋敷跡が31区画確認されている。これらの環濠屋敷は14～16世紀にわたり機能しており、各時期により名主層、細川氏の家臣、長宗我部氏の給人などが居住したと考えられる。

今回の調査では、寺の前・横手地区の西隣にあたるB1区(南土居の前地区)で、中世の環濠屋敷跡の一画が確認された。B1区で検出された環濠屋敷跡は、調査区のほぼ中央部を南北に走り西方に曲がる大溝によって区画されており、さらにその内側にも1条の溝跡が認められた。外側の溝の検出長は約89.5m、幅2.2～3.5m、深さ0.8～1.4mを測り、濠と言えものである。大溝の掘形は薬研堀であり、東西方向は断面V字形であるが、南北方向はU字形を呈する。屋敷を囲む大溝は、断面形からみても防御的機能を持っていた可能性が高い。また大溝のコーナー部には土橋が存在しており、二重の溝の間には土塀が巡らされていたと想定される。内側の溝跡は検出長約78.8m、幅0.65～1.5m、深さ0.16～0.54mを測り、水溜状の施設が付属している。また溝の区画内では掘立柱建物跡を構成するとみられる多数のピットと土坑が検出された。大溝からの出土遺物には、



B1区 SD105セクション

中国製青磁碗(龍泉窯)、備前焼の播鉢、甕、土師器の杯、皿、鍋、瓦質土器の釜などがみられる。

A10区は田村城館跡に付随する細勝寺の寺院内であり、田村城館跡の土塁が確認された。現存する土塁の総延長約50mのうち調査されたのは約24mであり、基底部幅約5.6m、土塁の高さは現況1.8mであるが、上部は後世の盛土であることが判明し、下部の約1.1mが



B1区 完掘状態

田村城館跡の土塁の基部が残されているものと考えられた。土塁断面からみて版築状の土層は認められなかった。また土塁の外側(西側)には前回調査された外郭の堀が確認されており、田村城館跡の西端が土塁と濠により確定したと言える。



A10区 土塁

この他にも中世の遺構・遺物は、分布密度は弥生時代に比べ低いが、調査範囲のほぼ全域で検出されており、環濠を持たない掘立柱建物跡や、井戸跡3基、溝跡、多数のピット、中世墓などが検出されている。中世墓とみられる土坑からは副葬された土師器の杯などが出土している。今回の発掘調査によって中世の資料は増加し、蓄積されたと言えるが、中世の田村については今後の整理作業と、今までに行われた『長宗我部地検帳』の研究成果などにより、さらに詳細な解明が進められるものであろう。

近世の田村は農村集落として発展し、土地の多くは水田として利用されたようである。発掘調査では多数の廃棄土坑や近世墓が検出された。廃棄土坑の中には直径3mを超えるものもみられ、肥前系磁器、備前焼、在地の能茶山窯などの陶磁器類が出土している。一方近世墓は前回の発掘調査より100基を超える墓が検出され、出土遺物からみて江戸中期以降には墓が多く作られるようになったことが示されている。今回調査でもB・F区を中心に近世墓が検出されており、特にF5区では20基を超える墓が南北方向に一列に並んで検出された。これらの墓は長方形で、長軸1.7m前後、短軸約0.6m、深さ約1mを測り、断面箱形であり、寝棺による埋葬が大半を占めている。墓の頭位は基本的に北を示しており、副葬品には碗、杯など陶磁器とともに、生前に愛用したとみられるキセルや、寛永通宝なども出土している。また近世墓の中には棺材がそのまま残存している例もみられた。近世における墓は屋敷地内の北部や西部に屋敷墓として造られる場合と、水田の一面や畔などに集中する例もみられ、このような光景は現在でも同じである。

またB4区では戦時中に造られた防空壕が検出され、現代の身近な歴史の一部をみることができた。さらに高知空港は第2次世界大戦中に建設された高知海軍航空隊の飛行場が前身であり、周辺には飛行機の格納庫である掩体が7基残存しており、当時の社会情勢を物語る貴重な資料と言える。



B4区 近世墓



B4区 防空壕

5. まとめ

今回の田村遺跡群の発掘調査は、平成8年度から開始され今年度で6年目となり、現在は整理作業が進められている。これまでの調査の結果、縄文時代・弥生時代・古代・中近世の多量の遺構・遺物が検出され、その内容には目を見張るものがある。特に弥生時代については、全国的にも検出例の少ない前期環濠集落や、中期末～後期初頭の集落のほぼ全域が調査されており、その意義は大きいと考える。

縄文時代では、新たに前期・中期の遺物が出土し、低地遺跡である田村遺跡群に人々が居住を開始した時期が前期にまで遡ることが明らかとなった。また後期の遺構・遺物の存在は前回の調査で確認されていたが、さらに後期の中でも時期によって場所を変えながら生活を営んでいたことが判明した。後期の遺物は多く、縄文土器や打製石斧とともに100点を越える石錘などが出土しており、川漁が活発に行われていたことがうかがえる。

弥生時代には、前期初頭から集落が営まれることが前回調査で確認されている。今回はそれに続く時期の前期環濠集落の調査が行われた。環濠はこれまで内濠の検出のみにとどまっていたが、さらにその外側に二重の外濠が巡ることが確認された。環濠内の様相も徐々にではあるが明らかとなり、今後は検出された土坑群の性格や、環濠の機能を含めた前期集落のあり方を解明していかねばならないだろう。また今回の調査によって、弥生時代の集落の変遷がほぼ明らかになったことも、大きな成果の一つと言える。環濠集落は前期後葉には廃絶され、集落は北に移動したようである。中期の遺構・遺物は、昭和57・58年度の周辺整備の調査で確認されている。集落は中期後半には再び南下してくるが、その全貌が表れるのは中期末～後期前半にかけての時期である。中期末～後期前半の時期が田村遺跡群の最盛期であったと考えられ、400棟を超える竪穴住居跡、掘立柱建物跡などの遺構とともに、多量の遺物が出土している。それらの中には青銅器、鉄器、ガラス製品なども認められ、大型住居の出現とともに集落内の有力者の台頭が示唆される。これら検出された遺構・遺物の検討により、集落の変遷と構成、遺構の組成や生業などの弥生集落と社会の解明に向けた研究の進展が望まれるところである。

古代の掘立柱建物跡は、前回と今回の調査を合わせて51棟が検出されている。これらは官衙的な建物配置をしており、条里地割に沿った方向性を持っている。出土遺物から掘立柱建物跡の多くは8～9世紀に機能したものと考えられ、物部川の右岸に位置する田村遺跡群だけではなく、左岸に所在する、古代の建物群が発見された下ノ坪遺跡や香長平野北部の土佐国衙跡、土佐国分寺跡などの遺跡も含めて、土佐の古代を考えていかなければならない。

中世には田村城館跡や千屋城跡が所在しており、今回調査でも環濠屋敷の一画が検出されている。前回調査の環濠屋敷群と田村城館跡の関係、さらに周辺部の千屋城跡などの中世城館と中世遺跡の分布や『長宗我部地検帳』などの文献からの研究を統合することにより、発掘調査の成果をより深く掘り下げることができると考えられる。古代から中世にかけての田村遺跡群周辺の様相については、発掘調査と整理作業を進める中で新たな視点により詳細な歴史の復原ができればと考えている。

田村遺跡群発掘調査概報

－高知空港第2次拡張整備事業に伴う平成8～13年度田村遺跡群発掘調査概要報告－

2002年3月29日

発行 財高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 ㈱飛鳥